

新入職員に思う

「グアパンゴ河」の話

川崎賢治

(福岡市消防局長)

アフリカの中央高地、ムーンマウンテンに源を発し、とうとうと流れる長流大河・グアパンゴ河という河の話、ある雑誌で読んだ。多分、思い出される方もあろうと思う。

いつの日か海に注ぐもの、これが普通言う、「河」というものである。しかし、この河は大砂漠に至り、それを横断しようとして一杯流れているうちに、河の意に反していつしか砂漠の砂に吸い込まれて消滅してしまう。海を見ずして終わる。不幸といえば不幸である。人生はグアパンゴ河でないことのほうが珍しいのである。

私は雑誌を拾い読みするのが好きである。この河の話は、なぜか私のあまり新鮮でない脳の片すみに今でも焼きついている。

私は消防行政に携わってまだ日も浅い。私は何の取り柄もないままに、民間企業から転職し、無我夢中で市長事務部局の職場を6~7箇所転々としてきた。勿論、私にとって消防局は初めての職場である。これまでの異動では感じたことのない一抹の不安と、心地よい(7)緊張感をおぼえながら、市長から辞令を戴いて早くも1年が経ってしまった。

今年も又、新入職員を受け入れる時期が来た。不況が影響してか、公務員指向が高まり特に最近では優秀な人材が多く入って来る。優秀な職員とは何を基準として言うのか多少曖昧な点はあるが、とにかく喜ばしい事である。私が危惧するのは、近年の傾向として、優等生ということを与えられた問題を速く解く能力と判断しがちであるということである。

新しい事態に直面したとき、自ら問題点を探し出し、自ら解決するための臨機応変な行動なり思考なりで局面を打開しようとするねばり強さのある能力が、いわゆる優等生には貧弱なような思いがしてならない。経験したことのない、ある壁にぶち当たった時に脆さがでるのである。

ある大手企業の場合であるが、入社後3年間に中卒から大卒まで平均でほぼ3人に1人が転職したり、それを考えたりすると聞いた。我々の職場では、そんな極端な話はあまり聞かないが、勿論、選択を誤つたと思つたら早く出直した方がよいに決まっている。しかし昔から「石の上にも3年」とよく言われた。プロ(職業人)として一つの職場を選んだ以上、困難を克服して初めて目的を達成する喜びがある。しばしば喜びに到達する前に挫折する。もったいない話である。

消防には、国民の生命、身体、財産を災害から守るという崇高な目的がある。

新入消防職員も、自分の歩む道は自分で選び、自分で決めてきたはずである。プロの条件とも言われる「集中力」「機転」「素早い対応」を身につけるために、依存心を断ち、自己をコントロールしながら失敗を恐れず、ギリギリまで自分で努力することが肝要だ。努力しでも、努力しでも実らないことが良くある。目的に向かって成しとげようと努力するその過程が非常に大切である。まさに人生はグアパンゴ河と同じ運命をたどる事が多いことを十分に認識すべきではないだろうか。